

令和6年度継続課題に係る継続評価書

- 研究機関 : TOPPAN(株)、(国研)情報通信研究機構、
マインドワード(株)、(株)インターグループ、ヤマハ(株)、
フェアリーデバイセス(株)
- 研究開発課題 : 多言語翻訳技術の高度化に関する研究開発
- 研究開発期間 : 令和2年度～令和6年度
- 代表研究責任者 : 中村 智憲

■ 総合評価 : 適

(評価点 17点 / 25点中)

(総論)

同時通訳という困難な課題にチャレンジし、短期間で成果を上げ、社会実装に向けた取組を行っていることは評価できる。大きな成果が得られており、本研究開発課題の成果が多くの場合で活用されることを期待する。なお社会実装を進める上では、事前に設定した研究課題に過度にとらわれず、社会実装を見据えた改良を加えていくこと等も考えるべきである。

他方で成果が上がっていることを積極的にアピールしていくことも重要である。巨額の国費が投じられていることを自覚した上で、取組内容・成果の周知も必要な取組であると認識し、報告書類や説明資料の記載・実際の発表内容等に対し、メンバーによるより一層の精査を求めたい。

(被評価者へのコメント)

- サーバーの負荷を考慮したスタンドアロン実装の追加など、社会実装に向けた取組を強化している点は評価できる。

- 大きな研究開発成果が得られており、多くの場面で活用されることを期待する。
- 「同時通訳」という世界でも類を見ない困難な課題にチャレンジしていることを積極的にアピールすべき。技術内容の説明においては、同時通訳だからこそ必要となる観点や問題点を従来の翻訳技術との比較で強調して説明すると説得力が増すと考える。
- 取組内容や成果をアピールする上でも、報告書類や説明資料の記載・実際の発表内容について、メンバー全体による精査を求める。非常にチャレンジングな内容に国費を投じて取り組んでいることを自覚し、その成果の正しい周知も必要な取組の一つとして捉えるべきである。
- 万博のためだけに研究をしているのではなく、様々な取組に予算を配分し、研究開発を行っている事を明確に説明すべき。事前に設定された研究課題にとらわれず、社会実装を見据えた改良を加えていくこと等も考えるべきである。

(1) 当該年度における研究開発目標(アウトプット目標)の達成(見込み)
状況・研究資金執行状況及び政策目標(アウトカム目標)の達成に
向けた取組の実施状況

(5～1の5段階評価) : 評価4

(総論)

計画通りに研究開発が進捗しており、目標は全て達成見込みである。スタンドアロンシステムの開発や自動翻訳の新しい評価軸の検討など、基本計画書に無い新規提案も評価できる。万博がプロジェクト成功の鍵となると考えられることから、万全の準備で臨んで欲しい。

(被評価者へのコメント)

- 日本語の省略補完技術の研究や主要6言語間の文分割同時通訳、4言語間のチャンク分割同時通訳の実現や、聴講者が「分からない」ことを話者に伝えるUIモデルの確立等、本年度の目標はすべて達成見込みである。
- 同時通訳に係る評価スコアの自動推定手法の確立については、実用性を意識した客観的な評価が進められている。
- サーバー負荷を考慮したスタンドアロン型の実装の追加や、自動通訳の性能評価の新しい評価軸としての「流暢さ」の検証等、基本計画に無い新規提案も評価できる。
- 万博での実証実験がプロジェクト成功の鍵となると考えられるので、万全の準備で臨んで欲しい。

(2) 研究開発実施計画・予算計画及び政策目標(アウトカム目標)の 達成に向けた取組

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

社会実証のユーザ評価方法の改善、ウクライナ語翻訳の基本性能向上、実証実験を踏まえたスタンドアロン型翻訳の導入については評価できる。また、字幕配信等の要求に応じた具体的な取組が行われている。

一方で社会実証から示唆された課題や、スタンドアロン型、クラウド型の使い分けといった万博での実証に向けての対応方針を明確にする必要がある。万博での実証評価に向けて、それぞれの場面に適した翻訳システムを選択できるよう計画的に実証実験を進めることを期待する。

(被評価者へのコメント)

- 昨年度の中間評価における指摘事項に対応し、社会実証のユーザ評価方法が改善されており、また、ウクライナ語の基本対訳・音声コーパスの拡充により、ウクライナ語翻訳の基本性能が向上されている。
- 種々の機会を捉えたアウトリーチや、システム開発の進展に向けたデザインの規範提示等、利用促進を図ろうとしている。万博での実証実験を見据えた取組や、字幕配信などの、実際の要求に対応する取組がなされている点は評価できる。
- これまでの実証研究を受けて、スタンドアロン型翻訳の導入を決めたことは評価できるが、今後、従来のクラウド型翻訳との使い分けの方針を明確にするべきである。また、万博での実証評価に向けては、細かい場面ごとにスタンドアロン型とクラウド型との使い分け、あるいは2つの併用等、綿密な計画を立てて実施されることに期待する。
- 社会実証から示唆された課題(例えば「説明者自身において専門用語への登録を可能とする改善」)についての対応が不明確である点は課題である。

(3) 実施体制

(5～1の5段階評価) : 評価3

(総論)

研究開発担当と実証担当の機関間の連携に改善が見られている。また、万博協会からの要請に応じた技術開発も評価できる。一方で、一部の技術課題の位置づけの明確化やメンバー全体での情報共有等に一部課題が残っており、プロジェクト終了に向けて、一層、効率的な連携を期待する。

(被評価者へのコメント)

- 研究開発の担当機関と実証の担当機関との間での連携に改善が見られる。プロジェクト終了に向けて、一層、効率的な協働を期待する。
- 万博協会からの要請に応じた技術開発(主要6言語間の任意方向での翻訳精度の確保など)も評価できる。
- コンソーシアムメンバー有志によるワークショップを実施等に見られる積極性を評価したい。
- 一部の技術課題(音源分離技術)の研究開発プロジェクト全体における位置づけの明確化や、メンバー全体での情報共有等に一部課題が残る。